

員とパリ及びニューヨークで会い、「このままいけば、日本は再び世界の孤児になりかねない」というのを聞いて、愕然とした。

その後の私は、活力に富み、頭脳の柔らかな子どものうちから、広い視野、多角的創造的な考え方や国際理解の芽を育てなければならぬと考え、まず、児童の海外文通・作品交換による交流を推進したのである。

海外を垣間見た私が、最も深い感銘を受けたのはカナダであった。一口に言えば、カナダの自然と人間に魅せられたのである。

欧米歴訪の際、私は90×180センチ大の児童版画三点を携え、加米英三か国で教育関係者に贈って、作品交換の希望も表明してきた。翌年秋、ウイニペック市教育局から作品が届いた。米英両国からは、音沙汰はない。帰国直後から、各地に出来た知人に手紙も書いたが、返事はカナダの友からだけであった。

やがてその一人、同市キング小学校のサミュエル校長が来日し、四十八年春、その一行を岡崎に迎えた。両校の児童たちは、すでに文通を始めていた。この日、岡崎公園の桜花爛漫たる茶席で、美合小学校の内田PTA会長が、カナダ児童の招待を申し入れ、これが日加小学生親善相互訪問のきっかけになったのである。

カナダの人たちは、誠実であった。万事ゆったりして物の方、考え方、心づもりがあり、率直な反面、思いやりが

深い。ユーモアに富み信義に厚い。質実重厚、生活のテンポはのろいが、私たちには良い反面教師で、つき合えば心も和む。

子どもたちには、スケールの大きなカナダの自然に触れさせ、自然と人間の関わりを学ばせたい。特に広大な平原と農業形態、無限の森林と林産業、そして自然を愛し自然を生かす人々の生きざまを理解させ、環境や風土が人をつくっていることを感得させたい。

明朗でおおらか、物事にあくせくしない気質や、家族の団らんや知己隣人との心温まる交際ぶりを、肌で知らせたいとも考えた。

遠く海を隔てるとはいえ、カナダは隣国である。私はウイニペックで接した日系人、カナダ人の双方から、戦中戦後三十年にわたり中部カナダ開発に尽くした日系人の並々ならぬ努力とその功績について聞いた。カナダは建国して日も浅く、多民族混合の連邦で、開放的でもあり、そして日系人の社会的地位の向上は、今や著しいものと見た。

また、米国の経済的桎梏に苦しむカナダの人々は、戦後奇跡的な復興を遂げ、経済的に対米独立の道をひた走る日本人の勤勉と努力に対し、ひそかに敬愛の念を抱いていた。そして、日本人の知識と科学技術に期待していた。

カナダは広大な土地と無尽蔵の資源を持つ。将来両国が相互に補完して繁栄し、相携えて世界平和に貢献するならば、寄与するところ極めて大なるものがあろう。

新しいことに苦勞はつきもの。相互訪問の実現までには紆余曲折が続き、双方ともに悪戦苦闘を重ねた。サミュエル、アン両校長の粘り強さには舌をまいた。ペン・パルたちの友情の灯も大人たちに反映して計画の挫折を防いだ。

前回の視察で州教育次官、市教育長、日本総領事等、有力な人たちと知り得たこと、その方々がなお在職中であり、親身になって支援していただけたことは、全く幸運であった。

とりわけ、見知らぬ異境の地、異邦人のもとへ、いたいけな我が子を送るカナダの親たちの逞しき、愛し子への信頼と期待の大きさには目を見張り、アン校長の私たちに寄せる信頼の重さに、強烈な感動を覚えた。

四十九年十月、アン校長のグロブナー小学校から、六年生男子四名、女子八名の親善使節が来校し、美合小の児童の家庭に分宿して通学した。

彼らは言語、風習、生活様式、教育事情等の高い壁を乗り越えて、学校、家庭、町内などすべての場で、おおらかで人間的、主体性に富み、かつ協調性豊かな民

族性を遺憾なく發揮して、町の人々を驚かせた。

歓迎集会で早速市長の胸に自分のバッジをつけて贈る、物おじしなない態度、Tシャツ一枚で登校する寒さに強い体質、注意をすなおに守る素直さ、納得できるまで質問する反面、相手の立場を思いやる心くばりなどが、随所に見られた。寿司を好む子と絶対食べぬ子、スポーツ気遣いと大嫌いな子など、個性は丸出し。走れば遅く、動作は緩慢であわてず騒がず、これまた町民と美合の子を驚かせた。

トヨタ自工の生産工程を見学して仰天し、千二百年の風雪に耐えた雨ざらしの三月堂に感銘し、鹿とたわむれながら「日本人は、世界一動物を愛する人たちだ」とも言った。彼らは彼らなりの印象記を残した。適度の外交辞令も加えられていて、楽しい内容である。

ウイニペックを訪れた美合の子どもたちも、いろいろな壁を平気で乗り越え、短い睡眠時間に耐え、ハード・スケジュールを見事にこなし、行く先々で人気者になつて、私ども大人を驚かせた。四日目には



「自信はなかった。ただ私どもがやってきた試みが何らかの形で紹介されれば、多くの学校でも、われわれもやってみようか」という気になるのではないか。そうならば、子供たちのためにいいことだという気持ちで書いただけ」というのが、権田さんがコンテストに応募した理由だ。作品は、権田さんが愛知県岡崎市の美合小学校で校長をしていたときのカナダとの児童交流について書いたものである。岡崎市では、現在数多くの小中学校で外国の学校との交流が盛んだ。市や一般市民の協力および理解もあって、権田先生の努力は実を結びつつある。